

## ＜ワークショップ報告＞

### ワークショップⅠ-A 「初年次教育の評価の方法を考える」

担当者： 山田礼子（同志社大学）

概要： 初年次教育の評価には、さまざまな方法がある。例えば、学生調査、授業評価、プログラム評価、ポートフォリオ評価等が代表的な評価法である。こうした方法のどれが適切であるか、どれが効果的であるかは学生の特徴やプログラムの性質によって異なる。言い換えれば、多様な大学や多様な学生の存在により、適切な評価方法も多様であるともいえる。2008年の初年次教育学会でのワークショップでは、参加者が自分の大学の初年次教育を通じて使用あるいは利用している評価方法を互いに紹介しながら、その特徴、利点などをより深く分析することによって、自分の大学に他の評価方法を取り入れていく可能性について考えてみた。

キーワード： 初年次教育、評価方法、学生調査、授業評価、プログラム評価

### ワークショップⅠ-B

※ ワorkshopⅡ-Bと同じ

### 「初年次教育で班活動を通じてゼミ発表スキルを獲得させる方法」

担当者： 藤田哲也（法政大学）・安永 悟（久留米大学）

概要： 藤田哲也（法政大学）が2007年度と2008年度に担当していた初年次教育科目「基礎ゼミ」では、後期には、班活動を中心にして、ゼミ発表スキルの習得を教育目標にしていた。ただし、単に学生数名で班を構成し、課題を与えるだけでは、いわゆる「フリーライダー」が出現するなどして、学生の間にもむしろ班活動に対して否定的な印象が根付いてしまう恐れがあった。そこで、協同学習の考え方に基づき、「協同学習の五つの基本原理」、具体的には「話し合いの際にミラーリングを必ず行うこと」や「二つの意味での個人の責任を果たすこと」などを学生に強調し、より有意義な班活動ができるように配慮した。本ワークショップは、藤田から具体的な授業運営法を紹介すると共に、残された問題点や改善のヒントについて、協同学習の専門家である安永悟（久留米大学）がコメントをすることで、フロアとの問題意識の共有と深化を図ることを目的として行われた。

キーワード： 協同学習、ゼミ発表スキル、班活動

## ワークショップI-C「どのように初年次教育の組織的導入をはかるか」

担当者： 濱名 篤（関西国際大学）

概要： 多数の大学が初年次教育の導入をするようになり、初年次教育自体についての一定の理解は得られるようになってきたものの、どのような体制作りをすればいいのか、どのような人が中心になり、どのような準備やFDをしてスタッフを確保していくのか、どのようにしてプログラム内容を決めていくのか、そのためにどのような教材や方法論を選択していけばいいのか、どのような評価プランを考えるのか等、初年次教育のプログラムづくりについて、参加者に能動的に参加してもらいながらWSを進めた。

キーワード： 組織的導入，FD，教材，学習成果

## ワークショップI-D「実行性・実効性のある初年次教育を実現する」

担当者： 菊池重雄（玉川大学）

概要： 形態こそさまざまだが、いまでは多くの大学が初年次教育を導入し、そのなかには他大学の模範となる優れたプログラムや実施組織をもつ大学も少なくない。その一方で、学長や学部長が示す初年次教育のビジョンを、現場の教員は適切に受け止め、自らの教育的使命として実践しているといえるだろうか。研究志向や自分の城意識が強いといわれる教員が納得して初年次教育を実践しているといえるだろうか。初年次教育のビジョンやプログラムがどれほど優れたものであっても、また組織体制がどれほど堅固に構成されていたとしても、現場で働く一人ひとりの教員が納得して、能動的・積極的・創造的にかかわらない限り、初年次教育の果実を豊かに実らせることはできない。本ワークショップでは、ともすれば性善説でとらわれがちな教員観（この人たちならうまくやってくれるだろう、やってくれるはずだ）を批判的にとらえ直し、実際に機能する初年次教育の体制をつくるにはどうすればよいかを、「ミドル・アップダウン」と「フェア・プロセス」の2つのマネジメント・ツールを紹介しながら参加者とともに考察した。

キーワード： 初年次教育のビジョン，初年次教育の現場，実際に機能する組織，ミドル・アップダウン

## ワークショップⅡ-A 「初年次教育における教職協働のあり方を探る」

担当者 : 足立 寛 (立教大学)

概要 : 最初に玉川大学コア・FYE 教育センター山崎課長から玉川大学の初年次教育における教職協働の取り組み事例について報告いただいた。玉川大学では、コア・FYE 教育センターを設置し、その取り組みは 2006 年度の特徴 GP にも選ばれており、ひとつの参考事例としてご紹介いただいた。その後、配布された自己チェックシートに所属大学の初年次教育の自己評価と、中心となる取り組みの内容、そこでの職員の役割等について、参加者に各自記入してもらい、その記入内容についてグループで情報を共有化し、討議を行った。最後に討議結果をいくつか発表いただいた。このような一連の作業を体験することで、多少なりとも初年次教育における教職協働の課題や重要性について、参加者全員が理解し共有化することができたのではないかと思う。

キーワード : 教職協働

## ワークショップⅡ-B (ワークショップⅠ-Bと同じ)

## ワークショップⅡ-C 「総合的な初年次教育プログラムを開発する」

担当者 : 杉谷祐美子 (青山学院大学)

概要 : いまや、日本の初年次教育は各大学に普及し、様々な実践活動が蓄積されつつある「第2ステージ」を迎えた。こうした状況のなか、多様なコンテンツを整理し、より効果的な教育内容・方法を精選したうえで、総合的なプログラムの開発を求める声大きい。本ワークショップにおいては、まず担当者から、これまでの調査や事例に基づき、初年次教育の領域別実施状況、重視する内容、効果的な取り組み等を提示した。その後、参加者には個人作業をベースに、各大学の初年次教育を見直し、コアになるプログラムを考案してもらった。さらに、その結果をグループワークのなかで分かち合い、プログラムの到達目標について議論をしたうえで、一連の作業を振り返ってもらった。その詳細については、本誌掲載の拙稿をご覧いただきたいが、参加者のみなさんから提供していただいたワークシートからは、初年次教育を実施するにあたって、大学を越えて共有しうる問題点や悩みが浮き彫りになり、また、今後のプログラム開発のヒントも得ることができたと思われる。

キーワード : 初年次教育, 教育プログラム, コンテンツ, 総合的, 開発

## ワークショップⅡ-D 「大規模・研究志向・人文系学部における「基礎演習」の設計と実践」

担当者 : 沖 清豪 (早稲田大学)

概要 : 本ワークショップでは、組織の文化や学問領域の特性から、初年次教育の実施にあたって抵抗が強い「大規模学部」、「研究志向の教員が多い学部」、そして「文学部・人文学部系」に注目し、事例報告とフロアからの意見を積み上げていくことが目指された。事例は早稲田大学文化構想学部・文学部の基礎演習が取り上げられ、導入後の1年半で生じた種々の問題を、(1)導入過程における混乱、(2)論文データベースの構築とその活用(の混乱)、(3)学生からの評価、(4)運営上の課題(内容の統一、特に添削をめぐる担当教員の負担)等を中心に紹介された。その後、9つのグループに分かれて自己紹介、事例に対する意見交換を行った後、各グループの議論を紹介してもらい、多様な意見が交換された。学生・企業関係者を含め、多様な立場の出席者に恵まれ、今後の改善策やFYEが必要なのかという原理論に至るまで、種々のコメントが出された。なお、終了後、提起していただいた意見をまとめた記録を担当者のウェブに公開し、参加者の便に供している(<http://www.f.waseda.jp/okikiyo/081129.pdf>)。

キーワード : 基礎演習, 大規模学部, 研究大学, 人文系学部, アカデミック・スキル